



Title	ペルミのステファンと14世紀モスクワにおける聖俗両権
Author(s)	伊丹, 聡一郎
Citation	スラヴ研究, 67, 31-58
Issue Date	2020-07-16
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/84282
Type	bulletin (article)
File Information	67_02_Itami_Soihiro.pdf



[Instructions for use](#)

ペルミのステファンと 14世紀モスクワにおける聖俗両権

伊 丹 聡一郎

序 論

ロシア史上、14世紀は教会の世俗政治への影響力が増大していった時代として重要な意味を有している。例えばこのことは、この時代の北東ルーシにおいて、モンゴルによる正教会への庇護や教会・修道院の数とその所領の急速な拡大などを背景に、キエフ期と比して聖職者による政治介入が増加していったことから明らかである。またこの時代は、モスクワ大公国による北東ルーシの政治的統合の進展とともに、モスクワにおいて国家と教会の連携が深まっていく時代でもあった⁽¹⁾。

こうした時代状況にあって、ペルミの聖ステファン (c. 1345-1396) という正教会の修道士による異民族宣教は、同時期の教会活動とはやや異質なものであった。彼は、ズィリヤン文字 (古ペルミ文字、アブル文字とも) という新文字を自ら創造し、聖書・祈祷書などの現地語への翻訳を通してコミ人への宣教をおこなった⁽²⁾。正教会全体の歴史において、このような文字創造を伴う異民族宣教を実行に移したのは、9世紀のキュリロスとメトディオスによるモラヴィア宣教以来、今日に至るまでこのステファンのみである。また彼は、1383年にモスクワにおいて初代ペルミ主教に叙任され、14世紀後半のモスクワ大公国とノヴゴロド共和国のルーシ北方地方を巡る抗争において積極的に活動した人物でもあった。

以上の事実からも明らかなように、ステファンの果たした歴史的役割は大きい。それにもかかわらず、従来のステファン研究は、彼が創造したズィリヤン文字や彼について書かれた

-
- 1 14世紀の北東ルーシにおける正教会の活動と、モスクワにおける聖俗両権の関係深化については差し当たり以下を参照せよ。John Meyendorff, *Byzantium and the Rise of Russia: Study of Byzantino-Russia Relations in the Fourteenth Century* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981); Смолич И. К. Русское монашество. 988-1917: Жизнь и учение старцев. М., 1997. С. 44-60 (独語原著刊行 1953年); Прохоров Г. М. Исихазм и общественная мысль в Восточной Европе в XIV веке // Русь и Византия в эпоху Куликовской битвы. Статьи. СПб., 2000; Janet Martin, "The Emergence of Moscow (1359-1462)," in Maureen Perrie, ed., *The Cambridge History of Russia. Vol. 1* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), pp. 158-187; ジョン・フェンネル (宮野裕訳) 『ロシア中世教会史』教文館、2017年、170-335頁 (原著刊行 1995年)。
 - 2 フィン・ウゴル系民族であるコミ人は元々異教 (アミニズム) を信仰する民であったが、14世紀後半にステファンが彼らの住むヴィチェグダ・ペルミ地方 (現在のコミ共和国南西部) で宣教をおこない、15世紀中葉までにはほぼ完全にキリスト教化された。コミ人の歴史について、より詳しくは以下を参照せよ。Rein Taagepera, *The Finno-Ugric Republics and the Russian State* (New York: Routledge, 1999), pp. 294-299.

聖人伝に関する言語学的・文学的検討が中心であった⁽³⁾。さらに、数少ない歴史学的研究も、ロシア文化の発展過程においてステファンの宣教事業がいかなる役割を果たしたかという文化史的な検討に重点を置くものがほとんどを占めている⁽⁴⁾。そのため本稿においては、ステファンが果たした歴史的役割を政治史的側面から考察する。それに際しては、ステファンの活動とモスクワ大公国、そして当時ルーシ全土の正教会を統括していたモスクワの全ルーシ府主教座とが、いかなる関係にあったのかを詳細に検討することが必要不可欠である。この検討を通して、ステファンの活動とモスクワ大公国の拡大との関連性を明らかにしつつ、14世紀後半のモスクワにおける国家と教会の関係をステファンの宣教事業という従来見られなかった視点から捉え直すことが本稿の目的である。このために以下ではまず、ペルミのステファンに関する先行研究と史料を整理し、本稿の課題を確認する。

先行研究と史料

ペルミのステファンに関する本格的な研究は19世紀から始まった⁽⁵⁾。しかし、先ほども述べたように、ほとんどの先行研究の関心はステファンの活動の文化的役割・意義に集中している。このような研究状況の中で、最初期にステファンの活動について政治的側面から考察をおこなったのはE. E. ゴルピンスキイである。ゴルピンスキイは、ステファンの宣教事業を後援していたのはモスクワの全ルーシ府主教座であったと考え、ペルミ宣教は府主教座の対外宣教計画の一環としておこなわれたものであると論じている⁽⁶⁾。

このようにゴルピンスキイが、ステファンと教会権力との結びつきを重視したのに対して、ソ連の研究者たちは、概ねステファンと世俗権力との結びつきを重視した。例えば、A. M. マルチュシェフは、ソ連初期に見られるような反宗教的なイデオロギーに基づいて、ステファンをコミ人に対する抑圧者として捉え、モスクワ国家によるコミ地方征服をもたらしたとし

3 例えば、*Лыткин В. И. Древнепермский язык: чтение текстов, грамматика, словарь. М., 1952; Духанина А. В. Издание жития Стефана Пермского: современное состояние и перспективы // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2010. No.4 (42).* など。

4 近年の研究では、*Лимеров П. Ф. Образ св. Стефана Пермского в письменной традиции и в фольклоре народа коми. М., 2008; Прохоров Г. М. «Некогда не народ, а ныне народ Божий...». Древняя Русь как историко-культурный феномен. СПб., 2010. С. 269-283* などが挙げられる。これらの研究は、ステファンの宣教事業をロシア文化の成熟と自立を示す重要な出来事として高く評価しているが、他方でその政治的な側面にはほとんど関心を向けていない。

5 帝政ロシア期のペルミのステファンに関する代表的な研究を以下に列挙する。*Макарий (Булгаков). Сказание о жизни и трудах святого Стефана, епископа Пермского. СПб., 1856; Савваитов П. И. О зырянских деревянных календарях и пермской азбуке, изобретенной святым Стефаном. М., 1873; Попов Е. Великопермская и Пермская епархия (1379-1879): пятисотлетие проповеди св. Стефана почти столетие Перми и почти трехсотлетие покорения Сибири. Пермь, 1879; Попов Е. Свяtitель Стефан Великопермский. Пермь, 1885; Лыткин Г. С. Зырянский край при епископах пермских и зырянский язык. 1383-1501. СПб., 1889; Красов А. Зыряне и просветитель их, святой Стефан, первый епископ Пермский и Устьвымский(1383-1396): к 500-ой годовщине со дня кончины святого Стефана, 1396 года Апреля 26 - 1896 года Апреля 26. СПб., 1896.*

6 *Голубинский Е. Е. История русской церкви. Т. 2. М., 1900. С. 262-296.*

て彼の宣教事業を批判している⁽⁷⁾。このようなイデオロギー色の強い批判的見解は徐々に鳴りを潜めていったものの、それでもステファンとモスクワ大公国との結びつきを強調する見方はその後も維持された。例えば、J. B. チェレプニンは、14 世紀後半のモスクワ＝ノヴゴロド抗争の過程を描く中で、ステファンの宣教事業はその開始時点からモスクワの後援を受けていたと述べている⁽⁸⁾。また Ю. В. ガガーリンも、コミ地方における正教会の発展過程に着目しながら、ステファンはモスクワ国家の間接的な協力者であったと論じている⁽⁹⁾。

これらの研究は、教会・修道院を人民の抑圧者として描くソヴィエト的な見方を含みながらも、ステファンの宣教事業とモスクワ大公国の拡大を結びつける新しい見方を提供したという点において大きな意義を有している。こうした見方は、欧米における研究にも引き継がれている。例えば、J. マーティンは、ステファンとモスクワ大公国との密接な結びつきを指摘しつつ、彼の宣教事業が 14 世紀後半から始まるモスクワ大公国の北方進出政策の一環であったと論じている⁽¹⁰⁾。また R. ターゲペラも、ステファンは政治的に親モスクワの立場であったとし、彼の宣教事業が結果的に後代のロシア国家によるコミ地方の併合と抑圧へつながったことを示唆している⁽¹¹⁾。

これらの欧米の研究に対して、ソ連崩壊以後のロシア国内におけるステファン研究は、ステファンの政治的自立性を強調するか、あるいは彼の政治的立場に深く言及しない傾向が強い。例えば、Г. М. プロホロフは、ステファンとモスクワとの結びつきを認めつつも、ペルミ主教としてステファンが自立的に活動しえたことを強調している⁽¹²⁾。他方で A. Ю. カティリョフは、ステファンと大公及び府主教との接触について丹念に史料を検討して明らかにしているが、それを以てステファンとモスクワとの関係がいかなるものであったのかを深く論じてはいない⁽¹³⁾。これらの研究は結局のところ、上述のようにステファンの宣教事業の文化史的意義について論じることに重点を置いている。

ペルミのステファンとモスクワとの関係についての先行研究は以上のようなものである。この点に関しての先行研究は量的にも質的にも十分ではなく、ステファンの政治的役割についての評価は未だ定まっているとは言い難い。先行研究の問題点と本稿の課題は以下の点にあると筆者は考える。

第一の問題点は、ペルミのステファンに関する史料の不足である。そのためか、先行研究においては、ステファンの様々な活動の内容や時期の特定すらも十分におこなわれてこなかった。しかしながら、彼の活動の内容や時期については、後述するような諸史料を比較再

7 Мартюшев А. М. Коми народ как объект московской завоевательной политики в XIV - XV вв. // Записки Общества изучения Коми края. Вып. 1. Усть-Сысольск, 1923. С. 54-79.

8 Черепнин Л. В. Образование русского централизованного государства в XIV - XV веках. М., 1960. С. 693-695.

9 Гагарин Ю. В. История религии и атеизма народа коми. М., 1978. С. 43.

10 Janet Martin, *Treasure of the Land of Darkness: The Fur Trade and its Significance for Medieval Russia* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), pp. 91-92.

11 Taagepera, *The Finno-Ugric Republics*, pp. 299-305, 394.

12 Прохоров Г. М. Святитель Стефан Пермский. М., 1995. С. 17-32.

13 Котылев А. Ю. Учение и образ Стефана Пермского в культуре Руси / России XIV - XXI веков. Сыктывкар, 2012. С. 96-100.

検討することでさらなる事実が明らかにできると考えられる。よって、本稿においてはこの作業をおこなうことを第一の課題とする。

第二の問題点は、既に述べたようにステファンの活動の政治的側面に関する検討の不足である。従来の研究のほとんどは、彼の政治的立場について単に「親モスクワ的」や「中立的」などと表現するのみで詳細な検討をおこなっていない。さらに、ステファンとモスクワとの結びつきを指摘する先行研究の多くが、モスクワの大公と府主教をある程度一体のものとして扱っていることも問題である。確かに、府主教アレクシイ（在位 1354-1378）の親モスクワ的な政治姿勢に代表されるように、14世紀の全ルーシ府主教座はモスクワ大公との連携を深めていた。とはいえ、この事実を以てこの時期の教会権力が後世のごとく世俗権力に完全に依存していたと考えるべきではない。事実、14世紀の府主教たちはモスクワ公家と協調しつつも、世俗権力から自立した活動を展開していた⁽¹⁴⁾。よって本稿においては、ステファンとモスクワとの関係を、ステファン、モスクワ大公国、全ルーシ府主教座の三者の相互関係として捉え、ステファンの個々の活動の分析をおこなう。この作業によって、ステファンとモスクワとの関係をより具体的に明らかにすることを第二の課題とする。

上記の検討のために重要となる史料は、『ペルミの聖ステファン伝』（以下、『ステファン伝』）⁽¹⁵⁾、『ヴィチェゴドスカ・ヴィムスカヤ年代記』（以下、『ヴィムスカヤ年代記』）⁽¹⁶⁾、そして『ストリゴリニキ異端に対する論駁書』（以下、『論駁書』）⁽¹⁷⁾の3つである。

まずは前者2つの史料について簡単に述べておこう。『ステファン伝』は、14世紀末から15世紀前半にかけて北東ルーシで活動した修道士エピファニイ・プレムードルイ（? - c. 1420）の手によって、1396年のステファンの死の直後に書かれた聖人伝であり、ステファンの生涯とその事跡が詳細に記されている。他方で、『ヴィムスカヤ年代記』は、ステファンが宣教をおこなったヴィチェグダ・ペルミ地方において16世紀頃に成立した地方年代記であり、これには『ステファン伝』には見当たらない出来事に関する記述も多数含まれている。両史料は、先行研究においても主史料として使用されてきたもので、多くの歴史的事実を伝えている。

もちろん、宗教文学であるキリスト教聖人伝や、後世に書かれた二次史料である年代記が、扱いに注意せねばならない史料であることは言うまでもない。事実、『ステファン伝』には出来事の時系列を物語上都合のよいように入れ替えていると思しき箇所が散見されるし、『ヴィムスカヤ年代記』にも後世の創作と思われるステファンの奇跡譚がいくつか含まれて

14 このことについては、前注1に加えて以下を見よ。Кричевский Б. В. Митрополичья власть в средневековой Руси. СПб., 2003.

15 *Епифаний Премудрый*. Слово о житии и учении святого отца нашего Стефана // Прохоров Г. М. Святитель Стефан Пермский. М., 1995. (以下、*Слово* と略)

16 Вычегодско-Вымская (Мисайло-Евтихиевская) летопись // Историко-филологический сборник Коми филиала АН СССР. Вып. 4. Сыктывкар, 1958. С. 257-271. (以下、*Вычегодско-Вымская летопись* と略)

17 А сие списание от правила святых апостол и святых отец, дал владыке наугородскому Алексею Стефан владыка Перемышский на стригольники // Казакова Н. А., Лурье Я. С. Антифеодальные еретические движения на Руси XIV - начала XVI века. М. -Л., 1955. С. 236-243.

いる。

とはいえ、そういった点を考慮してもなお、この 2 つの史料は歴史学的検討に耐えうる。まず『ステファン伝』については、エピファニイがステファンと直接の知己であったこと、ステファンの死の直後に書かれていること、聖人伝としては珍しいことに奇跡譚が全く含まれていないこと、時系列の組み換えはあるものの記されている出来事そのものは歴史的事実に基づいていること、写本系統がエピファニイのオリジナル版にまで遡れることなどがその記述の信憑性を高めている⁽¹⁸⁾。次に『ヴィムスカヤ年代記』については、確かに後代の創作であろう奇跡譚が含まれているものの、ステファンに関する出来事についての記述の多くが史実に基づいていることが先行研究によって既に指摘されている⁽¹⁹⁾。

次に上述の 2 つの史料に加えて、3 点目に挙げた『論駁書』も史料として重要である。この『論駁書』は、ストリゴリーニキと称される異端派に向けて、ステファン自らが書いた異端論駁文とされている⁽²⁰⁾。この『論駁書』がステファン自身の作であるかどうかを疑う先行研究も多いが、もし本当にステファンが関わった作品であるとすれば、当時モスクワと対立関係にあったノヴゴロドとステファンとの関係を見る上で重要な一次史料となる。『論駁書』を巡る先行研究の議論については後ほど詳しく見ていくが、ともかくもステファンの活動の実際を明らかにするにあたって、この『論駁書』の真正性を検討する必要があることは言うまでもない。本稿では、以上の 3 つの史料を中心に検討を進めることとする。

以上のような本稿におけるステファンの活動についての検討は、14 世紀モスクワにおける聖俗両権関係についての研究に資するものとなろう。とりわけ、詳しくは後述するが、モスクワ大公国による北方進出政策への府主教座の関与と、1378-1390 年の教会混乱期における聖俗両権関係を巡る議論において、ステファンの活動は重要である。何故なら、ステファンの宣教事業はモスクワによる北方進出と軌を一にしており、ステファンは上述の教会混乱の最中にモスクワの聖俗両権と幾度も関わりを持っているからである。それ故に、本稿の検討は、14 世紀後半のモスクワによる北方進出と同時期のモスクワでの教会混乱における聖俗両権の関係の一端を明らかにすることにも繋がるものである。

1. ステファンを取り巻く時代状況

1.1. モスクワ大公国の北方進出とノヴゴロド共和国

1240 年にモンゴルの侵攻によってキエフ大公国が滅亡して以来、北東ルーシの諸公国はモンゴル勢力の服属下に置かれることとなった。そのような状況下で、14 世紀に入ると急速に台頭してきたのがモスクワ公国であった。モスクワは、14 世紀前半にトヴェリ公国と

18 Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вторая половина XIV - XVI вв. Ч. 1. А-К. Л., 1988. С. 211-220.

19 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 12-13.

20 ストリゴリーニキ異端は、14 世紀のノヴゴロドで発生した異端運動であり、聖職売買への批判や教会ヒエラルキーの否定を主な特徴としていた。14 世紀のストリゴリーニキ異端については、以下の論文において詳細な検討が為されている。宮野裕「14 世紀のストリゴリーニキ『異端』と正統教会」『スラヴ研究』46 号、1999 年、57-89 頁。

の抗争に勝利してウラジーミル・スーズダリ大公位を獲得し、モスクワ大公国として北東ルーシ諸公国の盟主の地位を確立した。そしてドミートリイ・ドンスコイ（在位 1359-1389）の治世には、1380年のクリコヴォの戦いにおけるキプチャク・ハン国の武将ママイへの勝利を経て、キプチャク・ハン国の支配からある程度脱することに成功したのである。

14世紀にモスクワが台頭した要因としては、ウラジーミル・スーズダリ大公位の獲得、全ルーシ府主教座のモスクワへの移転と協力関係の構築、モスクワの経済的な成長などを挙げることができる。また、上述のドミートリイの治世をモスクワの発展史における画期として捉える見方は、研究者ごとに程度の差こそあれ、先行研究における共通見解と言っても差し支えないであろう。ドミートリイは、その治世の間にモスクワの領域を倍増させ、自身の遺言状においてウラジーミル大公位のモスクワ公家による世襲を確定させたのだから当然のことである⁽²¹⁾。

さて、本稿の議論において重要なのは、上記のドミートリイの治世、あるいはそれ以前からおこなわれていたモスクワの北方進出である。これは後述するように、毛皮交易への参入を目的としておこなわれたものであった。マーティンによれば、このモスクワによる北方進出と毛皮交易への参入は、モスクワの拡大と発展に大きく貢献した⁽²²⁾。また、この北方進出と毛皮交易への参入はステファンの宣教事業とも密接に関係している。何故なら、ステファンが宣教をおこなったヴィチェグダ・ペルミ地方は、ルーシ北方地方の東部に位置する毛皮の有力な産地だったからである。他方で、14世紀におけるモスクワの発展を論じる際に、上述の北方進出に焦点を当てた先行研究はさほど多くはない⁽²³⁾。それ故か、マーティンの著作も含む先行研究においては、この時期のモスクワの聖俗両権の協調関係を鑑みて、北方進出においても府主教座は大公と協調して事に当たっていたと半ば無意識的に想定する向きが強い。よって本稿においては、上述のモスクワの北方進出とステファンの宣教事業との関係を明らかにする過程で、北方進出におけるモスクワの聖俗両権の動向についても検討する必要がある。そのために以下では、北東ルーシにおける毛皮交易の歴史と、14世紀におけるモスクワの北方進出について簡潔に述べておく⁽²⁴⁾。

白海に注ぐ北ドヴィナ川、オネガ川、ヴィグ川などの流域を中心とするルーシ北方地方は、古くから良質な毛皮の一大産地であった。そこで獲れた貂、黒貂、ビーバーなどの毛皮は国内外の市場において常に高値で取引される高級品であり、ロシア人にとってこれらの毛皮

21 14世紀におけるモスクワの台頭と大公ドミートリイの事績に関する通説的見解については以下を見よ。フェネル『ロシア中世教会史』178-184頁。

22 Martin, *Treasure of the Land of Darkness*, pp. 86-92.

23 例えば、M. C. チェルカソヴァは近著で13-17世紀のルーシ北方地方へのロシア人の進出について論じているが、14世紀のモスクワの北方進出については概略的にしか触れていない。Черкасова М. С. Северная Русь: история сурового края XIII - XVII вв. М., 2017.

24 毛皮交易の歴史とモスクワの北方進出についての本稿の記述は、主に以下の論考に拠っている。Черепнин. Образование русского централизованного государства. С. 682-702; Martin, *Treasure of the Land of Darkness*, pp. 61-92, 130-166; Janet Martin, *Medieval Russia 980-1584* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), pp. 246-254; 西村三郎『毛皮と人間の歴史』紀伊国屋書店、2003年、135-142頁。

は、蜜蝋と並んで外国市場への主力輸出品であった⁽²⁵⁾。これらの毛皮の輸出ルートは主に 2 つあった。1 つ目はスホナ川を利用して、ルーシ北方地方からノヴゴロドを経由して西欧へと至る北方ルートであり、2 つ目はヴォルガ川やドニェプル川、ドン川などを利用して黒海へと至る南方ルートである。モンゴルによるルーシ侵攻以前は、北方ルートの中心がノヴゴロド、南方ルートの中心がキエフやブルガールであった。しかし、モンゴルの侵攻によってキエフ及びブルガールが大きな打撃を被ると、毛皮の交易センターとしての機能はノヴゴロドへ一極集中するようになる。

ノヴゴロドは、ルーシ北方地方に進出して広大な領域を影響下に置き、そこから得た毛皮や蜜蝋などをハンザ同盟を通して西欧に輸出することで利益を上げていた。とりわけ、モンゴルの侵攻以降、毛皮交易がノヴゴロドに集中するようになると、ノヴゴロドの毛皮交易による利益は莫大なものとなった。14 世紀に入ると、ルーシ北方地方における貂や黒貂などの減少に伴って、安価なリスの毛皮が主力輸出品となる。けれども、同時期のイングランドなどの西欧諸国でリス毛皮が流行していたこともあり、ノヴゴロドから西欧へ輸出される毛皮の需要が衰えることはなかった。こうして、ルーシ北方地方は引き続きノヴゴロドの経済的繁栄を支えていくことになる。

このような状況に変化が訪れるのは、モスクワ大公国による北方進出が始まってからのことである。この北方進出には、同時期のモスクワ商人の南方進出が関係している。モンゴルの侵攻以降、上述のように北方交易ルートをノヴゴロドが掌握する一方で、南方交易ルートはキプチャク・ハン国の支配下に置かれた。南方ルートにおいて新たな中心となったのは、キプチャク・ハン国の首都サライと、黒海北岸のイタリア植民市であった。その南方ルートにモスクワ商人が本格的に進出するようになったのは、14 世紀中葉にキプチャク・ハン国が相次ぐ後継者争いによって混乱を極めるようになってからのことである。そして、南方へ進出したモスクワ商人たちの主力商品は、やはり主にルーシ北方地方から産出される毛皮であった⁽²⁶⁾。

以上のようなモスクワ商人の南方ルートへの進出と前後して、モスクワは北方への勢力拡大を図った。例えば、大公イヴァン・カリター（在位 1325-1340）は、ロストフ公と自身の娘との婚姻を通して、1328 年にロストフ公国をモスクワの影響下に置いている。このロストフ公国は、モスクワとルーシ北方地方との中間に位置しているだけでなく、13 世紀中葉以降、モンゴルの侵攻を受けて旧ウラジミール・スーズダリ大公国領から北方へと逃れた人口を吸収して発展し、北東ルーシにおける経済の中心となっていた。ロストフ公国内の諸都市—ロストフ、ペロオゼロ、ウグリチ、ヤロスラヴリなど—はいずれも経済的に繁栄したが、とりわけ経済的に重要な地位を占めることになったのは、ペルミのステファンの生まれ故郷ウスチュグである。ウスチュグは、ロストフ公国の北東端に位置する都市であり、北ドヴィナ川、スホナ川、ヴィチェグダ川が交錯する地点にあった。それ故に、ウスチュグはルーシ北方地方から集められた毛皮をスホナ川を経由してノヴゴロドに送るための中継拠点として

25 松木栄三『ロシア中世都市の政治世界：都市国家ノヴゴロドの群像』彩流社、2002 年、286-287 頁。

26 14 世紀の南方交易ルートについては以下も参照せよ。松木栄三『ロシアと黒海・地中海世界：人と文化の交流史』風行社、2018 年、27-43 頁。

機能するようになり、経済的に大きく成長を遂げることとなった。そのため、モスクワがロストフ公国への影響力拡大を図った際も、重要視されたのはこのウスチュグであった。実際、モスクワは1364年に、ロストフ公国の内紛に介入する形でウスチュグを含むロストフ公国を事実上の傘下に収めている⁽²⁷⁾。

モスクワがウスチュグを傘下に収めたことは、モスクワによる北方交易ルートへの直接介入を意味していたが、14世紀後半のモスクワによる北方進出はそれだけに留まらない。モスクワはロストフ公国の領域を越えて、ルーシ北方地方へも進出するようになったのである。一連の北方進出には、ノヴゴロド商人に頼らない自立的な毛皮輸出ルートを構築するという狙いがあったと考えられる。すなわち、モスクワの意図は、ルーシ北方地方における毛皮利権の奪取とそれに伴う南方への毛皮輸出の拡大にあった。

しかし当然のことながら、北方交易ルートにおいて独占的な権益を持つノヴゴロドは、このモスクワの進出に激しく抵抗した。例えば、ノヴゴロドは1333-1335年のカマ川上流の権益を巡る紛争において、外交交渉によってモスクワの要求を撤回させている⁽²⁸⁾。また、1397-1398年にモスクワが北ドヴィナ川流域を獲得した際にも、これをすぐさま再奪取している⁽²⁹⁾。さらに、ルーシ北方地方の東部に位置するヴィチェグダ・ペルミ地方も、1370年代までノヴゴロドの影響下に置かれたままであった⁽³⁰⁾。

このような時代状況の中で、ペルミのステファンは1370年代の末頃からヴィチェグダ・ペルミ地方のコミ人へ宣教を開始した。そして、この時期を境にヴィチェグダ・ペルミ地方のコミ人による貢納は、ノヴゴロドではなくモスクワに対しておこなわれるようになっていったとされる⁽³¹⁾。以上の状況から考えて、彼の宣教事業がモスクワの北方進出と何らかの相関関係を有していたであろうことは想像に難くない。

1.2. 全ルーシ府主教座の混乱

14世紀はルーシの正教会が俗界への影響力を増していく時代であり、モスクワにおける国家と教会の連携が深まっていく時代であった。しかしながら、以下に示す1378-1390年のモスクワの全ルーシ府主教座における混乱期は、そうした14世紀全般の状況から見ると例外的な時期であったと言える⁽³²⁾。

27 Вычегодско-Вымская летопись. С. 257. 『ヴィムスカヤ年代記』は、モスクワがウスチュグを「獲得した」と伝えているが、恐らくこれは領土として併合したというよりも、上級君主としてウスチュグを傘下に収めたという程度の意味であろう。

28 松木『ロシア中世都市の政治世界』174-175頁。

29 *Бернадский В. Н.* Новгород и Новгородская земля в XV веке. М. -Л., 1961. С. 214-221.

30 遅くとも12世紀頃には、ノヴゴロドはコミ人に毛皮や蜜蝋などの定期的な貢納をさせていたと考えられる。しかし、ノヴゴロドのコミ人への要求は、名目上の臣従と定期的な貢納のみにとどまり、ヴィチェグダ・ペルミ地方への植民や代官の派遣まではおこなわれなかった。とはいえ、この時期のノヴゴロドが、ヴィチェグダ・ペルミ地方の権益を独占していたことは確かである。*Taagepera, The Finno-Ugric Republics*, p. 299.

31 *Ibid.*, pp. 299-300.

32 1378-1390年の教会混乱期についての本稿の記述は、主に以下の論考に拠っている。*Прохоров Г. М.* Повесть о Митяе: Русь и Византия в эпоху Куликовской битвы. Л., 1978. С. 82-110; *Флоря Б. Н.* Киприан. Православная энциклопедия. Т. 33. М., 2013. С. 630-638; 中村喜和「ミチャイ

この府主教座の混乱は、府主教アレクシイが 1378 年に死去した際に、モスクワ大公ドミートリイが、後任府主教としてコンスタンティノーブル総主教座から送られてきたキプリアンを拒絶して独自の候補を立てたことに端を発する。

988 年の「ルーシの洗礼」以来、全ルーシ府主教の叙任権は常にコンスタンティノーブル総主教の手中にあり、キエフ期の府主教のほとんどはビザンツから送られてきたギリシア人聖職者であった。モンゴルの侵攻以降も、混乱からロシア人とギリシア人が交互に府主教に就任する状況が続いていたとはいえ、府主教の就任には総主教による承認と叙任が必須であった⁽³³⁾。それにもかかわらず、大公が総主教の派遣した人物を拒否して独自候補を立てたことは、教会に対する世俗権力の介入として多くの聖職者から反発を招いた。さらに、大公が独自候補として立てたミハイル・ミチャイという人物が、修道士としての修行を積んでいない「白僧」で、大公の寵臣であったこともさらに聖職者たちの反感を買ったとされる。

結局のところ、ミチャイを府主教に推挙させるために大公が主宰した主教会議は、スーズダリ主教ディオニシイが、ミチャイの推挙に強硬に反対したことで失敗に終わった。やむを得ずミチャイは、総主教に直接叙任を受けるべくコンスタンティノーブルへ向かうが、その途上で病死した。しかし、その後も後任府主教を巡る争いは収まらず、1389 年に大公ドミートリイが死去した後、ようやく本来の候補者であったキプリアン（在位 1381-1382, 1390-1406）が府主教に就任することで終結を見たのである。

本稿の議論においては、とりわけこの教会混乱期におけるステファンとモスクワとの関係が重要となる。何故なら、史料上確認できるステファンの活動の多くがこの時期に集中しているからである。実際、ステファンは 1370 年代の末頃に宣教へと旅立っており、詳しくは後述するが、彼はこの教会混乱期に少なくとも 2 度モスクワを訪問している。この事実は、ステファンが上述の教会混乱に何らかの関わりを持っていた可能性を示唆している。ただし筆者の見るところによれば、以上の教会混乱期に関する先行研究は未だにプロホロフの研究を踏襲するに留まっている。そのような中で、プロホロフはステファンをキプリアンに近い立場であったと想定している一方で、ステファンとモスクワの関係についての具体的な検討はおこなっていない。よって本稿においては、上述の教会混乱期のモスクワにおける聖俗両権の関係を考慮しつつ、ステファンの活動について見ていく必要がある。これについては 2 節以降で吟味することとして、ひとまず次ではステファンの経歴について確認しておこう。

1.3. ステファンの活動

ペルミのステファンは、1345 年頃にウスチュグで生まれた⁽³⁴⁾。『ステファン伝』によれば、

事件の首尾：十四世紀ロシア・ビザンツ関係史の一断面』『一橋論叢』88 巻 5 号、1982 年、589-607 頁；宮野裕「14 世紀後半から 15 世紀初頭のモスクワ大公権力と教会権力」『ロシア史研究』98 号、2016 年、19-20 頁；フェネル『ロシア中世教会史』211-221 頁。

33 コンスタンティノーブル総主教と全ルーシ府主教の教会法上の関係性については以下を参照せよ。Meyendorff, *Byzantium and the Rise of Russia*, pp. 73-91.

34 ステファンの生誕の描写は『ステファン伝』のみならず、『ウスチュグのプロコピイ伝』にも記述がある。Слово. С. 56-57; Житие Прокопия Устюжского // Изд. ОЛДП. Вып. 103. СПб., 1893. С. 56-57. なおステファンの生年に関しては、先行研究において 1330 年説から 1346 年説まで幅広い説があるが、近年の研究においては 1340-1345 年頃と見なされることが多い。本稿では差し当たり、

彼はウスチュグの聖職者の息子でスラヴ系の出自であったという⁽³⁵⁾。その後、幼少の頃から勉学と教会奉仕に没頭していたステファンは、さらなる勉学に励むためにロストフへと向かい、同地の神学者グレゴリイ修道院において修道誓願をおこなった⁽³⁶⁾。この神学者グレゴリイ修道院は、北東ルーシ有数の学術機関としてギリシア語著作を含む大量の蔵書を有し、様々な学術活動に従事する修道士を多数抱えていたことで知られている⁽³⁷⁾。

このステファンのロストフ行きと修道誓願の年は、『ステファン伝』の修道誓願についての記述からある程度推定することが出来る。『ステファン伝』には、ステファンの修道誓願の時のロストフ主教はパルフェニイであったことが記されている⁽³⁸⁾。このロストフ主教パルフェニイは、『15世紀末モスクワ年代記集成』のロストフ主教の一覧において、1365年まで在位であった主教ピョートルと1370年頃に主教公となったアルセーニイ⁽³⁹⁾の間に記載されている⁽⁴⁰⁾。このことから、ステファンの修道誓願の年は1365-1370年の間だと考えられる。

ステファンの生年をプロホロフの説に拠って1345年前後としておく。この生年を巡る議論については以下を参照せよ。Proхоров, Святитель Стефан Пермский. С. 23.

- 35 Слово. С. 56-57. ステファンがコミ語を解したことから、ステファンの出自を巡っては先行研究において議論がなされてきた。例えば、А. Крацовが「ステファン=コミ人説」を主張する一方で、Л. Н. Смоленцевは「ステファンの母=コミ人説」を唱えた。他方で、А. Шевелев, С. П. Отрабинский, Прохоровらは、ステファンがコミ語を解した理由を幼少期からのコミ人との頻繁な接触に求め、ステファンはスラヴ人であったとみなしている。Красов. Зыряне и просветитель их. С. 153-155; Отрабинский С. П. Святой Стефан, просветитель зырян и первый епископ Пермский: по поводу 500-летия со дня его кончины, 1396-1896 г., 26 Апреля. М., 1896. С. 10; Шевелев А. Святой Стефан, епископ Пермский. М., 1896. С. 6-7; Смоленцев Л. Н. Великий зырянин // Родники Пармы. 93. Сыктывкар, 1993. С. 19; Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 5. 当時のウスチュグが北方の非スラヴ系諸民族とロシア人との交易地としての性格を持った町であったことを踏まえると、プロホロフらの説は説得力を有しているように思われる。ウスチュグへのコミ人の出入りについては以下を参照せよ。Martin, *Treasure of the Land of Darkness*, pp. 98-99; Федотов Г. П. Святые Древней Руси. М., 1990. С. 131-132.
- 36 Слово. С. 56-59.
- 37 Там же. С. 58-59; Федотов. Святые Древней Руси. С. 132; Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 8-10. 北東ルーシにおけるビザンツ教会著作の流布と修道院の学術拠点化については以下を参照せよ。Robert Romanchuk, *Byzantine Hermeneutics and Pedagogy in the Russian North: Monks and Masters at the Kirilo-Belozerskii Monastery 1397-1501* (Toronto: University of Toronto Press, 2007); 橋川裕之「シリアからロシアへ：黒山のニコンの著述の航跡」小澤実編『北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築：ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」報告書』北海道大学出版会、2010年、265-286頁；橋川裕之「コンスタンティノーブルのストウディオス修道院とルーシ修道士：正教文化の伝播について」小澤実、長縄宣博編『北西ユーラシアの歴史空間：前近代ロシアと周辺世界』北海道大学出版会、2016年、133-172頁。
- 38 Слово. С. 58-59.
- 39 アルセーニイ公は府主教アレクシイによってロストフ主教に叙任された1370年頃以降、公と主教を兼任する「主教公」であった。Proхоров. Святитель Стефан Пермский. С. 266.
- 40 Московский летописный свод конца XV в // Полное собрание русских летописей. (以下、ПСРЛ. と略) Т. 25 / М. -Л., 1949. С. 226. ただし、『ロゴシスキイ年代記』の全ルーシ府主教アレクシイが叙任した主教の一覧においては、パルフェニイはロストフ主教ではなくスモレンスク主教として言及されている。Рогожский летописец // ПСРЛ. Т. 15. Вып. 1 / Пг., 1922. С. 123. こ

例えばプロホロフは、その時期を 1365-1366 年頃と推定している⁽⁴¹⁾。

またステファンは、修道院時代に輔祭に叙任されている。エピファニイはステファンの輔祭叙任に関して、「そして、彼 [ステファン] の大いなる徳の故に、ロストフの公にして主教アルセーニイによって輔祭に叙任された」⁽⁴²⁾と述べている。ここで登場するアルセーニイは、上述のステファンの修道誓願のところで触れた主教公アルセーニイであるため、彼の在位時期から考えて、ステファンの輔祭叙任は 1370 年以降であると推定される。

『ステファン伝』によれば、修道院に入った後のステファンは聖書注釈やギリシア語の習得などの活動に従事した。また、彼がズィリヤン文字を創造してペルミ宣教の準備に取りかかったのもこの時期であったとされる⁽⁴³⁾。

文字創造と宣教の準備を終えた後、ステファンは 1370 年代の末頃からペルミ宣教を開始した。またステファンは、これと同時期にモスクワで司祭に叙任されている⁽⁴⁴⁾。宣教事業はピラス（現在のコトラス）を起点に、ヴィチェグダ川に沿っておこなわれた。宣教は順調に進展し、ステファンはヴィチェグダ川とヴィミ川の接点に位置するウスチ=ヴィミまで進出して拠点を構え、さらにそこからヴィチェグダ・ペルミ地方全域へ宣教を進めていった。このウスチ=ヴィミは、ステファンのペルミ主教叙任後にはペルミ主教座が置かれ、ヴィチェグダ・ペルミ地方の中心都市として発展していくことになる⁽⁴⁵⁾。

宣教がある程度の成功を収めてコミの教会組織の存続が揺るぎないものとなると、ステファンはコミの教会を教え導くための主教を求めてモスクワへ向かった。この主教を求める請願は、時のモスクワ大公ドミートリイと全ルーシ府主教ピーメン（在位 1382-1385）に対して為され、結果的にステファン自らが新設されたペルミ主教区の初代主教に叙任されることになった⁽⁴⁶⁾。

の問題については以下を参照せよ。Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 266; Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 97.

41 Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 9, 23.

42 Слово. С. 62-63.

43 Там же. С. 60-65. なお、ステファンがズィリヤン文字の創造とそれを用いた宣教をおこなった理由について、先行研究は主に地理的要因と文化的要因を指摘してきた。すなわち、彼の生まれ故郷のウスチュグがコミ人との交流が盛んな辺境の町であったことと、キュリロスとメトディオスによる 9 世紀のモラヴィア宣教からの影響である。この問題については差し当たり以下を参照せよ。Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 47-52.

44 Слово. С. 62-63.

45 Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 19, 23-25. なお『ステファン伝』においては、ステファンの宣教の様子と、それに対するコミ人の抵抗と受容の過程が丹念に描かれている。こうした描写は、ステファンが異教の魔術師パムとの審問対決に勝利を収める箇所でも最高潮を迎える。先行研究において、この審問対決は 1380 年末頃に実際に起きた出来事であると見なされている。ステファンと魔術師パムとの審問対決については以下を見よ。Слово. С. 122-147; Красов. Зыряне и просветитель их. С. 167; Richard M. Price, "The Holy Man and Christianization from the Aposcryphal Apostles to St. Stephen of Perm," in Jonathan Shepard, ed., *The Expansion of Orthodox Europe: Byzantium, the Balkans and Russia* (Hampshire: Ashgate Variorum, 2007). pp. 513-514; Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 102-103.

46 Слово. С. 164-167; Вычегодско-Вымская летопись. С. 259; ПСРЛ. Т. 15. Вып. 1. С. 149; ПСРЛ. Т. 25. С. 211.

主教叙任以降のステファンとペルミについてはいくつかの記述がある。まず『ヴィムスカヤ年代記』によれば、1385年にノヴゴロドがヴィチェグダ・ペルミ地方に侵攻している⁽⁴⁷⁾。次に『ヴィムスカヤ年代記』も含むいくつかの年代記史料によれば、翌1386年にステファンはノヴゴロドを訪問している⁽⁴⁸⁾。さらにステファンは、1390年に府主教キプリアンの招きでモスクワを訪れている⁽⁴⁹⁾。ステファンが、どのような目的でどの程度の頻度でモスクワを訪問したのか定かではないが、彼が1396年にモスクワ滞在中に死去していることを考えれば⁽⁵⁰⁾、モスクワに何度か足を運んでいたことは事実なのであろう。またこれとは別に、ステファンが1391年にトヴェリ主教会議に出席したという記述もある⁽⁵¹⁾。

以上が、ステファンの活動とその当時の時代状況である。それでは、ステファンの活動と、上述したモスクワ大公国の北方進出及び1378-1390年の全ルーシ府主教座の混乱はどのように結び付けられるであろうか。次節からは、ステファンに関わる各出来事に対する個別具体的な検討を通して、この点について明らかにする。

2. ステファンの叙任と全ルーシ府主教座の混乱

2.1. 司祭叙任と宣教への出発

ステファンとモスクワの関係を見ていくにあたって最初の重要な出来事は、ステファンの司祭叙任とペルミ宣教への出発である。まずはズィリヤン文字の完成と宣教への出発がいつであったのかを見てみよう。この日時について、『ステファン伝』では以下のように述べられている。

[天地開闢から] 6883年目の年 [西暦1375年]、ツァリグラード [コンスタンティノーブル] にギリシア人の皇帝イオアン [ヨハネス5世] が君臨していた世に、コンスタンティンの町の総主教座の長はフィロフェイ [フィロテオス] であった。また、オルダとサライにおいてはタタール人の上にママイが君臨していたが、それは永遠のことではなかった。ルーシは、ドミートリイ・イヴァーノヴィチ大公の世であり、その時には大主教も府主教もルーシのどこにもいなかった。しかし、ツァリグラードから府主教が到着するのを待っていた⁽⁵²⁾。

上記の引用によると、ズィリヤン文字の完成と宣教の開始は1375年ということになる。しかし、エピファニイは同時に起こりえない出来事を併記しており、その年代設定は正しいと

47 Вычегодско-Вымская летопись. С. 259-260. このノヴゴロドによるペルミ侵攻について、記録している史料は『ヴィムスカヤ年代記』のみである。これについての検討は、翌1386年のステファンのノヴゴロド訪問についても含めて3節でおこなう。

48 Там же. С. 260; Новгородская четвертая летопись // ПСРЛ. Т. 4 / СПб., 1848. С. 347; ПСРЛ. Т. 15. Вып. 1. С. 151.

49 Федотов. Святыя Древней Руси. С. 136.

50 ステファンの死については、『ステファン伝』に詳細な記述がある他、『ヴィムスカヤ年代記』にも記述がある。Слово. С. 208-213; Вычегодско-Вымская летопись. С. 260.

51 ПСРЛ. Т. 25. С. 219.

52 Слово. С. 190-191.

は言えない。例えば、1375 年には未だ全ルーシ府主教アレクシイは健在であり、「府主教もルーシのどこにもいなかった」という記述と矛盾する。実際に府主教座が空位となり、ルーシが「ツァリグラードから府主教が到着するのを待っていた」のは、1379 年から 1381 年にかけての時期である⁽⁵³⁾。また、仮に宣教への出発が 1379-1381 年だとしても、今度は言及されているコンスタンティノーブル総主教フィロテオス（在位 1353-1355, 1364-1376）の在位期間と矛盾する。

この問題についてプロホロフは、エピファニイが遠いビザンツの出来事よりもルーシでの出来事の方をより正確に記憶していたと仮定し、文字創造と宣教開始の時期を 1379 年からママイがクリコヴォの戦いで敗れてキプチャク・ハン国における支配権を喪失した 1380 年 9 月までの間だとしている⁽⁵⁴⁾。この仮定の蓋然性は高いが、筆者はその時期をより正確には 1379 年のことであったと考えている。その根拠を示すためには、先にステファンの司祭叙任について見ていかねばならない。

ステファンの司祭叙任は、宣教への出発とほぼ同時期におこなわれたと考えられる。『ステファン伝』によれば、ステファンは「府主教アレクシイの死後、ミチャイと呼ばれたミハイルという名の、彼 [アレクシイ] の代官の命で、コロムナ主教ゲラシムによって司祭に叙任された」⁽⁵⁵⁾ という。ミハイル・ミチャイは、1378 年の府主教アレクシイの死後、府主教叙任のための許可をコンスタンティノーブル総主教から得るべく、1379 年 7 月 20 日にはモスクワからコンスタンティノーブルへ向けて旅立った⁽⁵⁶⁾。この日時を踏まえると、ステファンの司祭叙任はミチャイの出発前に決められたものでなくてはならない。また『ステファン伝』の別の箇所によれば、ペルミ宣教を企図したステファンは、ミチャイ不在のモスクワで府主教代理を務めていたコロムナ主教ゲラシムの下に向かい、彼から司祭叙任と宣教への祝福を受けた⁽⁵⁷⁾。さらに、『ヴィムスカヤ年代記』においても、ステファンの宣教開始の記述は 1379 年の条に置かれている⁽⁵⁸⁾。これらの事実を総合すると、ステファンの宣教への認可と彼の司祭叙任は同時におこなわれ、その時期は 1379 年であったことが明らかとなる。すなわち以上のことから、ズィリヤン文字を完成させてコミ人に対する宣教を企図したステファンは、1379 年にコロムナ主教ゲラシムから司祭に叙任されるとともに宣教計画への祝福を受け、恐らくは同年中にヴィチェグダ・ペルミ地方へと旅立ったと考えて良いであろう。

この一連の出来事では、ステファンの宣教事業の後援者は誰であったのかが最大の問題となる。一介の修道士に過ぎなかったステファンが、宣教事業のための資金を自弁できたとは到底考えられない。それ故に、誰か有力者がステファンの宣教事業を支援していたと考えるべきであろう。ゴルピンスキイによれば、その後援者とは全ルーシ府主教アレクシイであっ

53 この時期、アレクシイの死後に後任の府主教候補となっていたミハイル・ミチャイは、コンスタンティノーブルへの旅路にあった。詳しい経緯については以下を参照せよ。中村「ミチャイ事件の首尾」30-34 頁。

54 *Прохоров*. Святитель Стефан Пермский. С. 17.

55 *Слово*. С. 62-63.

56 中村「ミチャイ事件の首尾」30 頁。

57 *Слово*. С. 74-75.

58 *Вычегодско-Вымская летопись*. С. 257.

た⁽⁵⁹⁾。この説に従えば、ペルミ宣教は、全ルーシ府主教座全体による後援の下におこなわれた一大プロジェクトであったと考えることもできる。

しかし、『ステファン伝』によれば、ステファンのコミ人への宣教計画は、教会内で激しい反対を招いたという⁽⁶⁰⁾。これが事実ならば、彼の宣教事業は教会の総意で押し進められたものではない可能性が高い。ここで注目すべきは、むしろ府主教アレクシイはステファンの宣教事業に反対していたというカティリョフの説である。カティリョフによれば、ステファンの叙任と祝福が1379年であった理由も、1378年に反対派のリーダーであったアレクシイが死去した隙を突いたからであった⁽⁶¹⁾。もしカティリョフの言うように、ステファンの後援者がアレクシイでないとすれば、彼の後援者として真っ先に想定されるのはコロムナ主教ゲラシムであろう。彼は、ステファンを司祭に叙任しペルミ宣教への祝福を与えた人物なのだから十分に有りうる話である。しかし、ここでさらなる疑問が浮かぶ。何故、ステファンは、司祭叙任と宣教への祝福のためにわざわざモスクワに向かい、そこに滞在していたコロムナ主教を頼ったのであろうか。ステファンは、ロストフの修道院に暮らす修道士であり、普通に考えればロストフ主教から叙任や祝福を受けるべき立場にいた。実際、既に述べた通り、ステファンは輔祭叙任に際してロストフの主教公アルセーニイから叙任を受けているのである。

この疑問を解決するためには、当時の全ルーシ府主教座の状況を改めて確認しておかねばならない。第1節でも述べた通り、1378-1390年の間は府主教座の混乱期であった。特に、ステファンが司祭に叙任された1379年は、大公ドミートリイが推す府主教候補ミハイル・ミチャイと、ミチャイの府主教叙任に反対する教会勢力との間で対立が先鋭化していた時期であった⁽⁶²⁾。ミチャイが大公ドミートリイの聴罪司祭であり、大公と極めて親密な関係にあった一方で、コロムナ主教ゲラシムもまた大公と密接な関係にあったと考えられる。そのことは、クリコヴォの戦いの直前に、戦いに赴くドミートリイに対して祝福を与えたのがゲラシムであったことから窺える⁽⁶³⁾。また、ミチャイが元はコロムナの司祭であったことも⁽⁶⁴⁾、ミチャイとゲラシムとのつながりを示唆しているかもしれない。

こうした三者の関係を踏まえると、ステファンの叙任と祝福がミハイル・ミチャイの命令を受けたコロムナ主教ゲラシムの手で為されたという『ステファン伝』の記述は重要である。

59 Голубинский. История русской церкви. Т. 2. С. 272.

60 Слово. С. 72-75.

61 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 101.

62 中村「ミチャイ事件の首尾」27-29頁。

63 ПСРЛ. Т. 4. С. 315. クリコヴォの戦い（1380年9月）が、中世ロシアにおいて重要な戦いであったことは言うまでもない。従来、この時にドミートリイに祝福を与えたのはラドネジのセルギイであるとされてきたが、これはВ. А. Кучкинが示唆したように恐らく後代に創作された伝説である。Кучкин В. А. Дмитрий Донской и Сергей Радонежский в канун Куликовской битвы // Церковь, общество и государство в феодальной России. М., 1990. С. 77. クリコヴォの戦い前後の行動も含めた史実のラドネジのセルギイの活動については以下で詳細に検討されている。David B. Miller, *Saint Sergius of Radonezh, His Trinity Monastery, and the Formation of the Russian Identity* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 2010), pp. 12-41.

64 中村「ミチャイ事件の首尾」28頁。

従来の研究において、ステファンの司祭叙任におけるミチャイの関与は特に言及されないか、触れられていたとしてもステファンとミチャイの関係は曖昧なままにされてきた⁽⁶⁵⁾。しかし、ミチャイは後代のルーシ教会において、教会秩序を乱したとして否定的な扱いを受けている人物である⁽⁶⁶⁾。教会が否定的に扱っていたミチャイの名をあえてエピファニイが書き記したということ自体が、ステファンの叙任と祝福が実際にミチャイの指示でおこなわれたことを示している。

これらのことから、ステファンの宣教事業を支持していたのは、当時事実上の府主教として活動していたミハイル・ミチャイであった可能性が高い⁽⁶⁷⁾。とはいえ、当時のミチャイと教会人たちの対立関係や、『ステファン伝』における宣教事業への教会内の反対についての記述を踏まえると、ステファンの宣教事業を府主教座全体が後援していたとは考え難い。ステファンは、教会内のミチャイ派聖職者たちによって支持され、彼らから後援を受けていたのではなからうか。ミチャイ不在の間に府主教代理を任されていることから見て、コロムナ主教ゲラシムもミチャイに近い立場であったのだろう。

コロムナ主教ゲラシムを含むミチャイ派によってステファンが後援を受けていたという以上の推定は、ミチャイ派の後ろ盾であった大公ドミートリイとステファンとのつながりを想起させるかもしれない。実際、チェレプニンも、ステファンの宣教事業は初めからモスクワ大公国の支援の下でおこなわれた述べている⁽⁶⁸⁾。とはいえ、チェレプニンは、これについて何の根拠も示しておらず、仮にこの段階でステファンが大公から何らかの支援を受けていたとしても、それがどのような類のものであったかは定かではない。よって、ここではステファンの宣教事業がミハイル・ミチャイの後援によるものであったと述べるに留めておく。大公とステファンの関係については、次にステファンの主教叙任を巡る状況を見ていく中で検討することにしよう。

2.2. 主教叙任について

ステファンのモスクワ訪問と主教叙任については、『ステファン伝』のみならず、『ヴィムスカヤ年代記』、『15 世紀末モスクワ年代記集成』、『ロゴシスキイ年代記』にも記述があり、年代記史料の全てがその時期を 1383 年としている⁽⁶⁹⁾。彼の主教叙任は、既にコンスタンティノーブルへの旅の途中に急死していたミハイル・ミチャイではなく、ピーメンがおこなった。ピーメンは、このミチャイの旅に同行した聖職者の 1 人で、ミチャイの急死後に使節団の中で府主教候補として選ばれ、コンスタンティノーブルにおいて府主教に叙任された人物である。その後、旅先でのピーメンの叙任を背信行為と捉えた大公ドミートリイによって 1 度は

65 管見の限りでは、フェドートフやプロホロフもミチャイとの関係については特に言及していない。また、カティリョフはこのことに触れてはいるものの深くは追求していない。Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 98.

66 中村「ミチャイ事件の首尾」21-22 頁。

67 ミチャイは府主教館に起居し、府主教座所領の収入を自由にし、司祭たちからも貢税を集めていたという。同論文、28 頁。

68 Черепнин. Образование русского централизованного государства. С. 693.

69 前注 46 参照

モスクワへの入市を拒否されたが、1382年には大公によって呼び戻され、1385年まで全ルーシ府主教を務めることになる⁽⁷⁰⁾。なおプロホロフは、この時期には珍しくはないことであったとして、大公ドミートリイがこの主教叙任の際に自らの税収入の一部を下賜したと推測しているが⁽⁷¹⁾、その証文は現存していない。

『ステファン伝』によれば、新設されるペルミ主教区の主教に誰を任命するかを巡って、府主教座における議論は紛糾した。ステファンはその争いに参加することも、必要な物以外を受け取ったり贈ったりすることもなかったが、驚くべきことにステファンが主教として選ばれたという⁽⁷²⁾。この議論において、具体的にどのようなやり取りがおこなわれたのかは不明であるが、確かに当時の教会においては聖職者叙任に際して賄賂が横行していた⁽⁷³⁾。『ステファン伝』のこの記述が事実であるか創作であるかは定かではないが、賄賂を贈らなかったステファンの選出に驚き、エピファニイがあえてこのことを書き記した可能性は十分にある。

カティリョフによれば、こうしてペルミ主教となったステファンは、修道院の創立、学校建設、コミ人の聖職者団と教衆（聖務従事者）の組織、書物の現地語への翻訳と写本作成、イコンの製作などに精力的に取り組むとともに、外敵から教区民を保護する責務も負うこととなったが、これは主教の本来の責務を超えるものであった⁽⁷⁴⁾。

さて、このステファンの主教叙任の背景に関して重要な点は2つある。1つ目は全ルーシ府主教ピーメンと大公ドミートリイがいかなる関係にあったかという点であり、2つ目は誰がステファンを初代ペルミ主教に推したのかという点である。

1点目については、大公ドミートリイによってモスクワに呼び戻されたピーメンが、呼び戻されてすぐに大公と何らかの対立関係に陥ったとは考えづらい。実際、『ステファン伝』によれば、ピーメンはペルミ主教に誰を叙任するかについて、大公ドミートリイと話し合った上で決定している⁽⁷⁵⁾。このことから推測するに、ピーメンとドミートリイは友好的な関係にあったと見るべきである。

2点目については、ステファンを推したのは明らかに府主教ピーメンその人であっただろう。中世ロシアにおいては、府主教が主教叙任に際して事実上の決定権を有していた⁽⁷⁶⁾。既に述べたように、教会内でペルミ主教の叙任を巡って争いが起きて意見が割れていたことも踏まえると、ステファンの主教叙任は、なおのことピーメンによる決定であったと考えて差し支えないであろう。

こうしたドミートリイとピーメンの友好関係及びピーメンによるステファンへの支持は、またしても大公ドミートリイとステファンとのつながりを想起させる。実際、1383年の主教叙任においては、大公ドミートリイとのつながりを示す以下のような史料がある。

70 中村「ミチャイ事件の首尾」32-35頁；フェンネル『ロシア中世教会史』214-219頁。

71 Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 22.

72 Слово. С. 162-167.

73 宮野「14世紀のストリゴリニキ『異端』と正統教会」61-62頁。

74 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 104.

75 Слово. С. 164-167.

76 Meyendorff, *Byzantium and the Rise of Russia*, pp. 82-83.

〔天地開闢から〕 6891 年目の年〔西暦 1383 年〕、ステファンは新たに洗礼を受けたペルミ人たちのために主教位を求めべく、モスクワの府主教の下に向かった。府主教ピーメンは大公ドミートリイと共に検討した後、ステファンをペルミの地の主教として叙任した。大公にとって、彼の叙任は何よりも誇るべきことであった。何故なら、大公はステファンをよく知り、以前から好んでいたからである⁽⁷⁷⁾。

上記の引用は、『ヴィムスカヤ年代記』の 1383 年の条である。主教叙任について、『ロゴシスキイ年代記』には、「この年の冬、府主教ピーメンはモスクワにて、2 人の主教を叙任した。スモレンスク主教ミハイルと、ハラップと称されるペルミ主教ステファンである」⁽⁷⁸⁾ というように、ステファンの叙任があったことだけが記されている。これと比べると、『ヴィムスカヤ年代記』の記述はいくらか詳細である。上述の記述が事実であれば、大公はステファンを「よく知り、以前から好んでいた」ことになる。この記述は、明確に大公ドミートリイとステファンとのつながりを示している。

もし大公とステファンが主教叙任以前に接触する機会があったとすれば、それは 1379 年の司祭叙任に際してのことであろう。1383 年以前にステファンがモスクワを訪れたのは、この司祭叙任の時以外に史料上確認できないからである。そうすると、やはりミチャイの指示による 1379 年の司祭叙任と祝福にも、大公ドミートリイが関わっていたのではないだろうか。

確かに、1379 年の司祭叙任における大公ドミートリイの関与を示す直接の証拠はない。また、大公ドミートリイとステファンの以前からの友誼を示す記述が『ヴィムスカヤ年代記』以外の年代記史料に見当たらないことも、その信憑性を低くしている⁽⁷⁹⁾。従って、ここでの大公の関与についての考察は、ある程度推測に頼ったものと言わざるをえない。

しかし、既に本節においては、ステファンの宣教事業が当時の府主教候補ミチャイと、後に府主教代理を務めるコロムナ主教ゲラシムの後援を受けていた可能性を指摘した。加えて、ステファンの主教叙任がピーメンの支持によるものであったことも示した。教会内での反対や争いの中で、ステファンに好意的な姿勢を示していたのが、全て大公と親交の深い聖職者であったことは偶然とは考えづらい。

以上の考察を踏まえて、筆者はステファンの宣教事業がモスクワ大公の後援を受けていたと考える。マーティンも指摘しているように、そこにはモスクワの北方進出政策が関係していたのではなからうか⁽⁸⁰⁾。そのことは、『ステファン伝』においてステファンと審問対決をおこなったコミ人の魔術師パムの以下の言葉にも表れている。

77 Вычегодско-Вымская летопись. С. 259.

78 ПСРЛ. Т. 15. Вып. 1. С. 149. 『15 世紀末モスクワ年代記集成』における記述もこれとほぼ同様である。ПСРЛ. Т. 25. С. 211. なお、引用内に出てくる「ハラップ」とはステファンのあだ名であり、年代記において頻繁に使われている。

79 事実、プロホロフもこの記述の信憑性に疑義を呈している。Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 22.

80 Martin, *Treasure of the Land of Darkness*, pp. 91-92.

私に耳を傾け、近頃モスクワからやって来たステファンに耳を傾けるな。モスクワから我らに、何か善きものもたらされたであろうか。そこ [モスクワ] から我らの下には、重荷、重い貢納、暴力、支配する者、通報する者、監視する者もたらされただけではないか⁽⁸¹⁾。

この記述は、ステファンとパムの論争の時点（1380 年末頃）で、コミ人が既にモスクワに対して反感を抱いており、ステファンをモスクワと関わりのある人物とみなしていたことを示している。このことも踏まえると、やはりステファンの宣教事業には最初からモスクワが関与していたと考えることができる。しかしながら、このことは、モスクワ大公国と全ルーシ府主教座が共に全面的にステファンを後押ししていたということを意味するものではない。次節ではこの点に留意しながら、主教叙任以降のステファンとモスクワの関係について見てみよう。

3. ペルミ主教区とモスクワ

3.1. ノヴゴロド軍によるペルミ侵攻

本節において検討するのは、主教叙任以降のステファンとモスクワとの関係である。この検討においてまず重要となるのは、1385 年のノヴゴロドによるペルミ侵攻と、翌 1386 年のステファンのノヴゴロド訪問である。既に筆者は、ステファンがモスクワ大公ドミートリイの後援を受けていた可能性を指摘したが、この 2 つの出来事においてはどうかであろうか。

全ルーシ府主教座にとって 18 番目となるペルミ主教区の創設は政治的に重要な意味を持っていた。何故ならこの出来事は、プロホロフも指摘するように、ヴィチェグダ・ペルミ地方が事実上モスクワの影響下に入ったことを意味していたからである⁽⁸²⁾。現実にモスクワ大公の統治権が及んでいたかとはともかくとしても、ヴィチェグダ・ペルミ地方がモスクワの全ルーシ府主教座の一教区となったことは紛れもない事実であった。

こうした状況は、これまで名目的とはいえヴィチェグダ・ペルミ地方を自らの大主教区の一部としてきたノヴゴロド大主教の反感を買うこととなった。『ヴィムスカヤ年代記』によれば、ペルミ主教区創設の報を聞いたノヴゴロド大主教は、1385 年にヴィチェグダ・ペルミ地方に軍を派遣した⁽⁸³⁾。この派兵については、当時のノヴゴロド大主教がノヴゴロドの事実上の国家元首として、国政を取り仕切る立場にあったことを考えれば何ら不思議ではない。これに対して、ステファンは「破壊からペルミの地を守るために、ウスチュグ人を招いた」⁽⁸⁴⁾という。そして、見事に「ウスチュグ人はノヴゴロド人に勝利した」⁽⁸⁵⁾のである。またこれ以外にも、ペルミ主教区はノヴゴロドからやって来る「ウシクイニク」や野盗の脅威に常にさらされていた⁽⁸⁶⁾。これらのノヴゴロドによる軍事的圧力は、ノヴゴロドがペルミ主

81 Слово. С. 124-125.

82 Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 21, 23.

83 前注 47 参照

84 Вычегодско-Вымская летопись. С. 260.

85 Там же.

86 Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 25. なお「ウシクイニク」とは、ヴォルガ川沿岸を

教区の創設を快く思っていなかったことを示している。ノヴゴロドにとっては、モスクワで叙任を受けたステファンによるペルミ主教区の創設は、モスクワ大公国によるヴィチュグダ・ペルミ地方の併合と同義であったと考えられる。

さて、1385年のペルミ侵攻について、より注目すべきは上述の『ヴィムスカヤ年代記』の記述である。ノヴゴロドの攻撃に対抗するため、ステファンは「ウスチュグ人を招いた」というが、何故ステファンはウスチュグに援軍を求めたのであろうか。その理由を、単にウスチュグがステファンの故郷であったことや、ペルミ主教区との地理的な近さに求めることは容易い。しかし、恐らくはウスチュグへの援軍要請の理由はそれだけに留まらない。筆者は、ウスチュグへの援軍要請は間接的にモスクワへの援軍要請であったと考えている。以下にその判断材料を示そう。

第一に、当時のウスチュグとモスクワ大公国との関係を再び確認しておかねばならない。第1節で既に述べたように、ウスチュグは1364年からモスクワの傘下にあった。このことは、1385年のウスチュグへの援軍要請がすなわちモスクワへのそれであった可能性を示唆している。

第二に、1380年代におけるモスクワとノヴゴロドの政治的対立を状況証拠として挙げる事ができる。この時期、モスクワ大公ドミートリイは、1380年のクリコヴォの戦いに参加しなかったノヴゴロドに対して敵対的な外交姿勢を示していた⁽⁸⁷⁾。また、ノヴゴロド側も、1385年には全ルーシ府主教の教会裁判権からのノヴゴロド大主教区の離脱を宣言するなど、反モスクワ的な姿勢を強めていた⁽⁸⁸⁾。実際、大公ドミートリイは、1386年に軍勢を引き連れてノヴゴロドの町を包囲している⁽⁸⁹⁾。この政治情勢を踏まえれば、ノヴゴロド軍のペルミ侵攻に際してモスクワが支援に動いた可能性は十分にある。

第三に、『ヴィムスカヤ年代記』に、1386年のモスクワとノヴゴロドの軍事衝突についての記述があることが挙げられる。それによれば、1386年にヴォルガ川沿いに侵攻したノヴゴロド人を、モスクワ大公ドミートリイが打ち破ったという⁽⁹⁰⁾。『ヴィムスカヤ年代記』は、ほぼステファンとペルミに関わる出来事のみを記述している地方年代記である。それにもかかわらず、直接ペルミとは関係のないこの戦いの記述が存在すること自体が、この時期のモスクワの軍事行動がステファンとペルミにとって重要な意味を持っていたことを示しているのではなからうか。

以上の点を踏まえると、ウスチュグによる援軍派遣にモスクワ大公が関与していた可能性は十分にある。もちろん、この援軍派遣をウスチュグの独力でおこなわれたものとも考えることもできる。とはいえ、当時有数の大国であったノヴゴロドの侵攻を前に、ウスチュグが何の後ろ盾もなく援軍を派遣したとはやはり考えづらい。史料的制約故に、モスクワの関与を

中心に各地で海賊・略奪行為をおこなっていたノヴゴロド人河川賊のことである。この時期の「ウシクイニク」の活発な活動については以下を参照せよ。Bernadskiy. Новгород и Новгородская земля в XV веке. С. 36-51; 松木『ロシアと黒海・地中海世界』43-48頁。

87 宮野「14世紀のストリゴリニキ『異端』と正統教会」86頁。

88 ПСРЛ. Т. 4. С. 342.

89 Там же. С. 344.

90 Вычегодско-Вымская летопись. С. 260.

示唆する直接の証拠は示すことは難しいが、モスクワ大公がウスチュグを通して、ペルミ主教区の防衛を担った蓋然性は高い。もし仮にそうであれば、ステファンは1385年の段階においても、大公ドミートリイによる後援を受けていたと考えることができる。

3.2. ステファンのノヴゴロド訪問

こうしたノヴゴロドとの対立の最中、ステファンは1386年にノヴゴロドを訪問している。訪問中に、時のノヴゴロド大主教アレクシイ（在位1359-1388）とステファンの間にどのようなやり取りがあったのかはわかっていないものの、ステファンはノヴゴロドにおいて手厚い歓迎を受けた後、ペルミへと帰還したとされる⁽⁹¹⁾。このステファンのノヴゴロド訪問は事実と見て間違いない。何故なら、『ヴィムスカヤ年代記』だけでなく、『ロゴシスキイ年代記』と『ノヴゴロド第四年代記』にも、ステファンのノヴゴロドへの来訪が記されているからである⁽⁹²⁾。また、ステファンは、ノヴゴロド滞在中にストリゴリーニキ異端に対する『論駁書』をノヴゴロド大主教に手渡している。

このステファンのノヴゴロド訪問にはどんな目的があり、何故ステファンは『論駁書』を手渡したのであろうか。この訪問については、『ロゴシスキイ年代記』と『ノヴゴロド第四年代記』が訪問の事実を簡潔に伝えるだけである一方、『ヴィムスカヤ年代記』のみが彼の訪問の目的を伝えている。それによれば、「この年、主教ステファンはノヴゴロドとの不和の故に、ノヴゴロドへと向かった」⁽⁹³⁾という。この「ノヴゴロドとの不和の故に」という記述からは、1386年のステファンのノヴゴロド訪問が、前年のノヴゴロドによるペルミ侵攻に関する和平交渉のためであったことが窺える。他方で、ストリゴリーニキ異端に対する『論駁書』については、先行研究において議論的となってきた。よって以下では、ノヴゴロド訪問におけるステファンとモスクワの関係について見ていく前に、『論駁書』が書かれた経緯を述べつつ、それを巡る問題について検討する。

ストリゴリーニキ異端とは、14世紀ノヴゴロドにおいて発生した異端運動である。この異端運動は、ステファンがノヴゴロドを訪れた1386年には、ノヴゴロド大主教座も看過できないほど伸張していた。そこで、ノヴゴロド大主教アレクシイは、訪れていたステファンにストリゴリーニキ異端に対する『論駁書』の執筆を依頼したと考えられる。しかし、この『論駁書』の著者がステファンであるかどうかを疑う先行研究も多い。例えばマカーリイは、この『論駁書』がノヴゴロドの教区民へ向けられたものであることから、府主教ないし総主教による作であるとしている。何故なら、主教には他の教区の信徒へ指導をおこなう権限は認められていないからである⁽⁹⁴⁾。またプロホロフも、『論駁書』のステファンの名が記された序説部分は、オリジナル版が現存しておらず多くのヴァリエントが存在することから信憑性に欠けるとしている。その上で、プロホロフは、著者として最も有力な人物としてスーズダリ主教ディオニーシイを挙げている。彼は、1382年にコンスタンティノーブル総主教ニロスがストリゴリーニキ異端に対する論駁をおこなった際に仲介役を務め、この異端問題に熱

91 Красов. Зыряне и просветитель их. С. 172-173; Федотов. Святые Древней Руси. С. 136.

92 前注48参照

93 Вычегодско-Вымская летопись. С. 260.

94 Макарий (Булгаков). История русской церкви. Т. 5. СПб., 1886. С. 428-430.

心に取り組んでいた人物である。最終的にプロホロフは、ステファンはディオニシーの『論駁書』に自身の名を添えて、ノヴゴロド大主教に渡しただけであると結論づけている⁽⁹⁵⁾。

このように著者をステファンとすることに否定的な研究者がいる一方で、この『論駁書』を署名の通りステファンによるものであるとする研究者も多い。例えばプライスは、『ステファン伝』に表れるステファンの人物像と『論駁書』の内容の類似性を指摘し、ステファン本人の作であることを主張している⁽⁹⁶⁾。またカティリョフも、1378-1390年の教会混乱期には主教による他教区への関与が常態化していたとして、『論駁書』がステファンによって書かれたものであっても矛盾はないとしている。加えてカティリョフは、序説部分の署名のヴァリアントについても、元々のステファンの署名が時代とともに失われ改変されただけであると述べている⁽⁹⁷⁾。

これらの先行研究の見解は、推測に頼らざるを得ない部分が多いが故にどれも決め手を欠く。よって、ストリゴリーニキ異端に対する『論駁書』を誰が著したのかを明確にすることは難しい。とはいえ、以下に若干の私見を述べてみたい。確かに、1378年から始まる教会混乱期においては、主教による他教区の信徒への指導や干渉は起こりえたかもしれない。特に1385年に府主教ピーメンがモスクワを去ってからは、1390年まで上級監督権を持つ全ルーシ府主教がほとんどモスクワに不在であったのだからなおさらである⁽⁹⁸⁾。また、ノヴゴロド大主教アレクシイが元々は聖ソフィア教会の管財人であり、教会の典礼や教義に詳しくなかった人物であることも踏まえると⁽⁹⁹⁾、外部に異端論駁を依頼したこと自体は当然の流れであったように思われる。他方で、序説部分の署名に関する疑義も考慮すべき問題であり、ステファンはこの『論駁書』に自身の名を添えただけという可能性も大いにある。ただし、プロホロフさえも、実際の著者ではないにしろ、ステファンが『論駁書』をノヴゴロド大主教に手渡したこと自体は否定していない。ステファンのノヴゴロド訪問が和平交渉のためのものであったことを考えると、その交渉の席で和平の見返りとして『論駁書』を求められたとしても何ら不思議ではない。よって、この『論駁書』が誰の手によるものなのかは不明だが、それはノヴゴロド訪問の際にステファンによって手渡されたものであり、恐らくはステファンはその内容を熟知していたと考えて良いであろう。

それでは、これらのことを踏まえた上で、1386年のステファンのノヴゴロド訪問に対するモスクワの関与について考えてみよう。これについてB. A. リバコフは、モスクワ大公の関与を指摘している。リバコフによれば、ステファンのノヴゴロド訪問は、モスクワ大公による対ノヴゴロド戦略の一環であった。そこには、ステファンにノヴゴロドで起きているストリゴリーニキ異端の問題を暴かせることで、ノヴゴロド大主教座の権威を失墜させる意図があったという⁽¹⁰⁰⁾。

しかし、こうしたリバコフの説に対して、宮野裕は否定的な見解を示している。宮野は

95 Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 27-29.

96 Price, "The Holy Man and Christianization," pp. 508-510.

97 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 104-106.

98 フェンネル『ロシア中世教会史』220-221頁。

99 宮野「14世紀のストリゴリーニキ『異端』と正統教会」65頁。

100 Рыбаков Б. А. Ремесло древней Руси. М., 1948. С. 277.

ステファンのノヴゴロド訪問について、ステファンの『論駁書』の中にノヴゴロド大主教座に対する批判は含まれていないこと、ステファンがこの出来事の前後にモスクワと直接何らかの接触を持ったことを示す史料が無いこと、さらにこの時期の全ルーシ府主教座は府主教不在の状態であったことなどから、彼のノヴゴロド訪問の裏にモスクワの対ノヴゴロド戦略を見出すことはできないとしている⁽¹⁰¹⁾。

これらの先行研究は、モスクワ大公国と全ルーシ府主教座をある程度一体のものとして扱っているが、ここでは両者を分けて考えてみる必要がある。まず、ステファンのノヴゴロド訪問において、全ルーシ府主教座の関与はほとんど考慮に入れなくて良い。何故なら、既に述べたようにこの時期の全ルーシ府主教座は府主教不在の状態であり、ストリゴリーニキ異端の問題に積極的に介入する余裕はなかったと考えられるからである。実際、ストリゴリーニキ異端の問題に対して、全ルーシ府主教座が関与したことを示す証拠は全くない⁽¹⁰²⁾。このことから考えても、全ルーシ府主教座は、ステファンのノヴゴロド訪問に何も関与していなかったと見て良いであろう。

他方で、モスクワ大公の関与についてはどうであろうか。前年のノヴゴロドによる侵攻に際してのモスクワとペルミの庇護関係から見て、大公がステファンのノヴゴロド訪問の動きを全く知らなかったということはなかろう。とはいえ、上述のように各種年代記や『論駁書』からは特に大公の関与を読み取ることはできない。またカティリョフも、このノヴゴロド訪問を単に和平交渉のためのものであったと捉え、ステファンがノヴゴロド大主教に『論駁書』を手渡したのは、ノヴゴロドとペルミ主教区との和平締結の見返りであったと述べている⁽¹⁰³⁾。

これらのことを踏まえると、ステファンによるノヴゴロド訪問には、大公も府主教座も深く関わっていないと考え方が自然であろう。大公ドミートリイがこの訪問を知っていた可能性は高いが、何らかの政治的使命をステファンに与えていたとまでは考えにくい。そのことは、繰り返しになるが『論駁書』にノヴゴロド大主教座に対する批判が含まれていないことから窺える。『ヴィムスカヤ年代記』に記されている通り、ステファンのノヴゴロド訪問の目的は、純粹に前年のノヴゴロドとの衝突によって生じた不和を解消するための和平交渉にあったと見て良いのではなかろうか。そうであるならば、1386年のノヴゴロド訪問は、ステファンがヴィチェグダ・ペルミ地方の聖俗両面における指導者として、ペルミ主教区を守るために独自に展開した外交活動であったと言えるかもしれない。

3.3. 晩年のステファンとモスクワ大公及び全ルーシ府主教との関係

最後に、ステファンとモスクワの聖俗両権との関係について、彼の晩年の活動から見てみよう。その中で重要な出来事は、トヴェリ主教会議への参加、モスクワ訪問、そしてステファンの葬儀と埋葬である。

ノヴゴロド訪問以降、ステファンは主教としての本来の職務に戻り、1396年に死去する

101 宮野「14世紀のストリゴリーニキ『異端』と正統教会」85-87頁。

102 同論文、84頁。

103 *Котылев*. Учение и образ Стефана Пермского. С. 105.

までペルミ主教区の運営に専念した。とはいえ、第 1 節で述べたように、この時期のステファンは何度かモスクワを訪問しており、モスクワにて死去している。また、エピファニイが著した『ラドネジの聖セルギイ伝』には、モスクワへの旅路の途中でのステファンとラドネジのセルギイとの霊的な交流を示す奇跡譚がある⁽¹⁰⁴⁾。聖人伝内の奇跡譚ではあるが、この時期にステファンとセルギイは何らかの交流を持っていたのかもしれない。

他方で、まず注目すべきは全ルーシ府主教キプリアンとの関係である。これについて見ていくにあたって重要な出来事として、1391 年のトヴェリ主教会議への出席がある。以下は、『15 世紀末モスクワ年代記集成』の記事である。

府主教キプリアンはトヴェリに向かった。彼と共に、ギリシア人の府主教マトフェイとニカンドル、スモレンスク主教ミハイル、ペルミ主教ステファン・ハラップ、ズヴェニゴロド主教ダニールがいた。そして 8 月 8 日、聖母就寝祭において、アルセーニイがトヴェリにおいてその主教に叙任された⁽¹⁰⁵⁾。

上記の引用には、会議の出席者としてステファンの名が記されている。このトヴェリ主教会議は、現トヴェリ主教の解任と新たな主教の叙任のために招集されたものであった。カティリョフは、この主教会議へのステファンの参加を、彼が教会内で重要な人物と見られていたことを示す証拠とみなしている⁽¹⁰⁶⁾。また、キプリアンが主宰した主教会議にステファンが招待されて参加し、新しいトヴェリ主教の叙任をキプリアンと共におこなったことが事実であれば、両者の関係は良好なものであったと考えられる⁽¹⁰⁷⁾。

しかし、このステファンのトヴェリ主教会議への参加を事実であるとみなすのは早計である。ステファンの名は、『15 世紀末モスクワ年代記集成』よりも早い時期に成立したとされる『ロゴシスキイ年代記』や『シメオノフ年代記』のトヴェリ主教会議の参加者リストには存在しない。そして『ステファン伝』にも、トヴェリ主教会議についての記述はない⁽¹⁰⁸⁾。『ロゴシスキイ年代記』と『シメオノフ年代記』は、府主教キプリアンが編纂に関わった『14 世紀モスクワ年代記集成』に依拠した年代記である。この主教会議の主宰者であるキプリアンが、年代記編纂においてわざわざステファンだけを参加者リストから外す理由は特に見当たらない。そのことを踏まえると、トヴェリ主教会議へのステファンの参加は後代の挿入である可能性は否めない。以上のことから、トヴェリ主教会議へのステファンの出席の記事は

104 Житие Сергия Радонежского // Памятники литературы Древней Руси. XIV - XV века / М., 1981. С. 294-299.

105 前注 51 参照

106 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 100.

107 正教会においては、新たな主教の叙任には管区内の主教全員が参加した主教会議の同意が必要であり、そのためにしばしば主教会議が開催された。しかし、中世ロシアでは、新たな主教を選出するための主教会議に府主教区内の主教全員が集まることはほとんどなく、府主教が少数の主教とともに候補者を叙任した。これについては以下を参照せよ。Meyendorff, *Byzantium and the Rise of Russia*, pp. 81-82.

108 このことについては、プロホロフも指摘している。Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 30.

信憑性に欠ける。

また上述の記事と同様に、ステファンとキプリアンの親密な関係を示唆する以下の『ステファン伝』の記述も事実ではない可能性が高い。

彼 [ステファン] の人生の終わりの時が来て、彼の旅立ちの時が訪れ、彼の死の時が迫った時に、彼はモスクワの府主教キプリアンの下へ到着することとなった。何故なら、彼 [ステファン] は極めて愛されており、彼もまた [キプリアンを] とても愛していたからである⁽¹⁰⁹⁾。

上記の引用に従えば、ステファンとキプリアンの関係は親密であり、それ故にステファンはモスクワを訪問したことになる。しかし、ここでエピファニイは、1396年のステファンのモスクワ訪問の目的をキプリアンに会いに行くためであるかのように記しているが、この時、キプリアンはモスクワにはいなかった。さらに、キプリアンはステファンの葬儀にも参加していないのである⁽¹¹⁰⁾。

これらの事実は、ステファンとキプリアンの関係に疑義を投げかけるものである。この両者の関係を見る上で重要なのは、これまでのステファンの叙任に関わっていた人物が誰であったのかである。ステファンの司祭及び主教への叙任において、彼を後援した府主教候補ミハイル・ミチャイと府主教ピーメンは、双方ともキプリアンにとって政敵であった。政敵によって叙任されたステファンを、キプリアンが快く思っていなかった可能性は十分にある。実際、キプリアンは1390年に全ルーシ府主教に返り咲くや否や、ピーメンが府主教として為したことは無効であると宣言している⁽¹¹¹⁾。ステファンにとっては幸いなことに、ペルミ主教への叙任まで無効とされることはなかったようである。とはいえ、やはりこの宣言を見るに、キプリアンはピーメンに近い聖職者を快く思っていなかったのではなからうか。以上のような事実を踏まえると、ステファンとキプリアンが親密な関係にあったと考えるのは無理があるように思われる。

ステファンとキプリアンの関係について、史料からこれ以上のことはよくわからない。ステファンの主教叙任が無効にされなかったことから考えて、両者の関係が完全に破綻していたわけではないのだろう。これについて、カティリョフは上述の状況から、ステファンがキプリアンとの関係を修復する必要に迫られていたと指摘している⁽¹¹²⁾。もしそうであるならば、晩年のステファンの何度が確認できるモスクワ訪問は、キプリアンとの関係修復のためのものであった可能性がある。

これに対して、ステファンとモスクワ大公の関係についてはどうであろうか。ステファンの晩年における大公との関係を示す史料も、キプリアンの場合と同じくほとんど見当たらない。しかし筆者は、ステファンは晩年も大公との友好関係を維持し続けていたと考える。以下にそのことを検討する上で重要な『ステファン伝』の記述を引用しよう。

109 Слово. С. 204-205.

110 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 100. この時、キプリアンは外交交渉のためにポーランドとリトアニアを訪問していた。フェンネル『ロシア教会史』222-223頁。

111 Прохоров. Повесть о Митяе. С. 181-187.

112 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 100.

そして、彼〔ステファン〕が死去した時、公、ボヤーレ、修道院長、司祭、都市民とその他の人々が、彼の随行のために集まり、秩序をもって付き従った。そこで埋葬のための決められた歌を歌い、彼の浄き体を棺へと入れたのである。〔そして彼の遺体は〕称賛さるべき都市モスクワにおいて、聖なる救世主修道院にある石造教会に安置されることとなり、教会内の左側へ納められた⁽¹¹³⁾。

既に述べたように、ステファンはモスクワ滞在中に死去した。これは 1396 年 4 月 26 日のことであった⁽¹¹⁴⁾。上記の引用からは、ステファンの葬儀は盛大におこなわれ、彼の遺体は救世主修道院の石造教会に埋葬されたことがわかる。この葬儀へのモスクワ大公ヴァシーリイ 1 世（在位 1389-1425）の関与は明言されていないが、プロホロフによれば、この教会はモスクワのクレムリン内にあり、モスクワ大公家の成員のための霊廟として使われていた⁽¹¹⁵⁾。また別の先行研究によれば、この葬儀が大公ヴァシーリイによって執り行われた可能性が指摘されている⁽¹¹⁶⁾。実際に大公がこの葬儀に関わったことを示す何らかの証拠はないが、ここにステファンが葬られたということ自体が、事実であればステファンと大公との強い結びつきを示しているように思われる。以上のように、ステファンの葬儀についての記述からは、ステファンが自らの死に至るまでモスクワ大公と密接な関係にあったことが窺える。

結 論

本稿は、ペルミのステファンの活動とモスクワ大公国の拡大との関連性を明らかにしつつ、その作業を通して 14 世紀モスクワにおける国家と教会の関係を捉え直すことを試みた。その結果、ステファンの宣教事業にはモスクワとの結びつきが見られた。とはいえ、モスクワ大公と全ルーシ府主教座とは、ステファンの宣教事業に対する姿勢は全く異なっていた。モスクワ大公ドミートリイは、府主教候補ミハイル・ミチャイ、コロムナ主教ゲラシム、府主教ピーメンら自身に近い聖職者を通して、ステファンの宣教事業を一貫して支援し続けた。恐らくこれは、モスクワ大公国の毛皮交易への参入とそれに伴う北方進出政策に、ステファンの宣教事業が有益であると判断してのことであった。他方で、大公に近い聖職者以外が、ステファンの宣教事業を後援した形跡はない。むしろ、府主教アレクシイや府主教キブリアンは、ステファンの活動を快く思っていなかった可能性すらある。加えて、1378 年から 1390 年までの間の全ルーシ府主教座は混乱期にあり、一貫した政策を実行できる状態にはなかった。もちろん、これらの事実を以てして、大公に近い聖職者以外が全てステファンに敵対的であったなどと考えるべきではない。とはいえ、これらのことを踏まえると、ステファンの宣教事業は当時の全ルーシ府主教座の教会政策とは無関係におこなわれていたものである可能性は高い。以上のように、ステファンの宣教事業に対する後援は、モスクワの聖俗両権が一致しておこなったものではなかったと考えるべきである。よって、モスクワの大公と府主教をある程度一体のものとして扱ってきた従来のステファン研究の多くは見直さ

113 Слово. С. 212-213.

114 前注 50 参照

115 Прохоров. Святитель Стефан Пермский. С. 31-33.

116 Котылев. Учение и образ Стефана Пермского. С. 100.

れる必要がある。

ただし、ステファンがモスクワ大公から後援を受けていたからと言って、彼の宣教事業を単なるモスクワによるヴィチェグダ・ペルミ地方の併合であったと見るべきではない。ペルミ主教としてステファンは、あくまでコミ人たちと「コミ人の正教会」を守るために活動した。ステファンは、モスクワ大公の後援と庇護を受けつつも、ヴィチェグダ・ペルミ地方の指導者として、モスクワに対してある程度の自立性を維持していたと考えられる。そのことは、ステファンがコミ語での宣教やコミ人聖職者の叙任に尽力したことや、1386年のノヴゴロドとの和平交渉においてステファンが主教でありながら独自に外交活動を展開していることから窺うことができる。

では、以上のようなペルミのステファンの活動についての検討結果は、モスクワの聖俗両権関係に関する研究史上にどのように位置づけられるであろうか。まず言えるのは、モスクワの北方進出における聖俗両権の関係についてである。確かに、ステファンのペルミ宣教と彼の主教としての活動は明らかにモスクワの北方進出と対ノヴゴロド政策の一断面を示している。しかし既に述べたように、彼の活動はあくまでモスクワ大公との個人的な友誼と利害の一致によっておこなわれたものであり、府主教座はこれに関与していない。したがって、14世紀後半のモスクワの北方進出において、聖俗両権の協調関係を半ば無意識的に前提としてきた従来の研究は修正される必要があろう。次に言えるのは、1378-1390年の教会混乱期における聖俗両権関係についてである。これまで見てきたステファンの活動からは当時の混乱期における大公と聖職者たちとの複雑な相互関係が窺える。このことは主としてプロホロフの見解を踏襲してきた教会混乱期についての先行研究に、ステファンの活動という新たな視点を提供するものである。実際、従来の研究においてステファンはキブリアンに近い立場であると考えられてきたが、彼はむしろ大公に近い立場であったことが本稿の検討を通して明らかとなった。以上のように、ステファンの政治的役割への検討は、14世紀モスクワにおける聖俗両権の関係が常に完全な協調関係にあったわけではないということを再確認しつつ、上記の2つの問題の一端を従来にはない視角から明らかにするものである。

他方で、上記の検討結果は、ペルミ宣教が何らかの計画によって始まったものではなく、ステファン自らの着想に基づくものであった可能性を示唆している。では、ステファンを異民族宣教へと駆り立てたものは何であったのだろうか。この点に関しては、本稿で扱った政治史的側面に加え、ビザンツやブルガリアなどの他のギリシア正教世界からの文化的影響について見ていくことで一層明瞭になるとと思われる。それ故に、これを今後の課題としたい。

Stephen of Perm and the State-Church Relationship in Fourteenth-century Moscow

ITAMI Soichiro

The fourteenth century was a significant era, when the Orthodox Church's power grew in Northeastern Rus' and its interactions with the state in the Grand Principality of Moscow increased. The mission initiated by Stephen of Perm (c. 1345-1396) to the Komi, Finno-Ugrian inhabitants of the Vychegda Perm region, the eastern part of the Russian North, occupied a distinctive place in the Church's vibrant activities of this era. Stephen created the Old Permic script, translated Christian texts into the Komi language, and converted the Komi to Christianity—the single case in the long history of the Orthodox Church since the mission of Cyril and Methodius in the ninth century up to today, when the mission among non-Slavic peoples was accompanied by the creation of a new script. In addition, appointed as the first bishop of Perm in 1383, Stephen played an active role in alleviating the conflict between the Grand Principality of Moscow and the Republic of Novgorod. Previous scholarship, however, has not meaningfully captured Stephen's important political role, primarily addressing the cultural aspects of his activities. This article sheds fresh light on the political implications of his mission to the Komi, detecting its connection with the expansion of the Grand Principality of Moscow and thereby clarifying the relationship between Stephen of Perm, the grand prince of Moscow, and the metropolitan of all Rus'. This helps us reconsider state-church interactions in fourteenth-century Moscow.

The close linkage of Stephen's mission with Moscow notwithstanding, there was a discrepancy between the grand prince of Moscow and the metropolitan of all Rus'. Dmitry Donskoy (r. 1359-1389), the grand prince of Moscow, was a constant supporter of Stephen's mission to the Komi, together with his intimate clergy including the metropolitan candidate Mikhail Mityay, Bishop Gerasim of Kolomna, and Metropolitan Pimen. Presumably, Dmitry understood that Stephen's initiative would be useful for the Grand Principality of Moscow's northward expansion policy in general and its fur trade in particular. Yet no evidence shows that anyone but the pro-Dmitry clergy supported Stephen's mission; the Metropolitan Alexius and Metropolitan Cyprian might have been unhappy with Stephen's activities. Thus, it may be safe to argue that Stephen's mission to the Komi was an enterprise independent of the Russian Orthodox Church and that the Church did not act in concert with the Grand Principality of Moscow. This does not mean that Stephen's mission to the Vychegda Perm was totally subjugated to Moscow's will, however. Stephen as bishop of Perm endeavored to preserve the "Komi Orthodox Church" catering to the Komi people. His use of the Komi language and appointment of Komi clerics as well as his involvement in the peace negotiation with Novgorod in 1386 account for the degree of leeway Stephen enjoyed from Moscow.

In sum, this article contributes to the clarification of the relationship between Stephen of Perm, the grand prince of Moscow, and the metropolitan of all Rus' in the following manner. Dmitry's patronage of Stephen's mission was an outcome of friendship and mutual interest. Given the grand prince of Moscow's policy of northward expansion, Stephen's mission may well have facilitated the later annexation of the Komi region. In addition, Stephen as bishop of Perm played a significant political role in arbitrating in the strife between

伊丹 聡一郎

Moscow and Novgorod over the Russian North. The fact that the Church in unison did not orchestrate Stephen's mission reveals that such a state-church coordination as evident in later periods did not exist in fourteenth-century Moscow.